

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04857

研究課題名（和文）教師の「熟練性」のライフヒストリー的研究—目標構造の多層化の契機とそのプロセス—

研究課題名（英文）A life history study of teacher's "skillfulness"--through the opportunity for multi-layered goal structure and its process

研究代表者

森脇 健夫（MORIWAKI, Takeo）

武庫川女子大学・教育研究所・教授

研究者番号：20174469

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：教師の発達には観の形成と授業スタイルの確立だが、観の形成は、具体的には目標概念の多層化として描くことができる。そのことを、初任期教師と熟練教師の比較対照研究、及び熟練教師の授業における学習者に対する働きかけや支援とそのライフヒストリー的理解によって明らかにすることができた。事例研究として行ってきたが、事例研究としては事例数が限られているとはいえ、対話的モデルの作成と事例研究の往復によって、モデルの適用可能性を高めることができた。さらに先行実践研究やこれまで私が行ってきた事例研究とも照合する。課題としては、より多数の事例研究へと広げること、また仮説モデルの妥当性や信頼性を高めることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義として次の3点を挙げることができる。第1点は、熟練教師への発達を具体的に描くことができた点である。従来、ドレフスモデル（初心者 達人）をベースにして語られてきた熟達モデルは、目標概念の多層化として説明できることを示した。第2点は、目標概念の多層化として説明できるとすれば、多層化を促す体験（経験）がどのようなものか、どんなときにおこるかを明らかにすることができた点である。自然に経験を積みれば熟達化が起きるのではなく、経験とそのリフレクションが熟達化の契機になることが明らかになった。第3点は、実践的知識と技術的知識の統合点としての目標の意義の再評価ができた点である。

研究成果の概要（英文）： The teacher's development is the formation of views and the establishment of teaching style, also the formation of views can be depicted concretely as the multilayering of goal concepts. This can be clarified by comparing and contrasting first-year teachers with experienced teachers and by understanding the life history of learners and their support in experienced teachers' classes. Although it was conducted as a case study, the number of cases was limited, but by creating a dialogical model and going back and forth between case studies, the applicability of the model was increased. In addition, it was compared with previous practical research and case studies that I have conducted. The challenge is to expand to more case studies and to increase the validity and reliability of the hypothetical model.

研究分野：教育方法学 教師教育学

キーワード：熟練教師の「熟練性」 目標構造の多層化 ライフヒストリーのアプローチ 観と授業スタイルの形成 熟達化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

研究成果「教師の「熟練性」のライフヒストリー的研究—目標構造の多層化の契機とそのプロセス—」

1. 研究開始当初の背景

本研究「教師の「熟練性」のライフヒストリー的研究—目標構造の多層化の契機とそのプロセス—」は、熟練教師が授業を行う際、短期的には授業において実現を企図する学習者の資質・能力とともに、中期的な目標（例：教科指導全体で育てるべき資質・能力）、また長期的な目標（例：人間教育）を持って授業に臨んでいるのでは、という仮説をもとに、熟練教師の授業の参加観察、インタビューによって、目標構造、およびその生成過程について明らかにしようとする研究である。

いわゆる「熟練教師」の実践記録（公刊されている）には、単なる授業内容及び目標だけではなく、学習者の汎用的な資質・能力（思考・判断・表現力）、人格の陶冶（非認知能力を含む主体性の育ち）まで踏み込んだ実践が多々ある。おそらく実践記欲の読み手は、そのことを感じ取り、心動かされるのである。築地久子氏の社会科の実践では、ある子どもの「心性」の自覚と変容が核として存在するし、中学校英語教師の田尻吾郎の実践では、ある子どもの友だちとの信頼関係の構築が中心に置かれている。一方、授業内容の深みも担保されている。より正確に言えば、授業内容の深まりと人格の陶冶が相即的に進展しているのである。

これまで私は熟練教師の授業における「観」（授業を計画し、運営し、ふりかえる際、教師が一貫して持つ信念(belief)の体系)の形成と変容および授業スタイルの形成の過程を授業参観、また事後のライフヒストリーインタビューによって明らかにする研究を行ってきた。さまざまな校種、教科、ロケーションを超えて、熟練教師の「観」と授業スタイルの形成には一定の「共通性」があることを明らかにしてきた。それを「教えること」から「学ぶこと」への視点の転換、あるいは、「伝達的授業モデル」から「共同生成の授業モデル」への転換（例えば秋田喜代美 1995）ととらえることもできよう。

しかし私は熟練教師の学習者への働きかけにはきわめて多層的な目標意識がかかわっているのではないかと考えるようになった。45分、あるいは50分の授業の中で、効率的・合理的に学ぶことを第一義と考えるならば、あえて時間をとって、個別指導に時間を費やすことは「無駄」とされるかもしれない。しかし、熟練教師の中にはあえてその「無駄」を厭わないときがある。それは一時間の授業を一時間だけの授業としてとらえるのではなく、より長いスパンの中における位置づけができていないからではないかと考える。教える←学ぶ、あるいは伝達モデル→共同生成モデル、では教師の個々の場面における働きかけを説明するにはあまりにも漠然としてモデルである。

2. 研究目的

1つは、学校教育現場における初任期教師へのアドバイスを依頼されることが多かったこともあり、初任期教師とベテラン教師の授業における指導、及び事後のインタビューを通し、授業に

おける学習者への働きかけに至る判断、及びその根拠を明らかにし、比較対照を行うという研究戦略である。おそらく授業を行うことに精一杯の初任期教師の判断過程には、一時間における授業目標のみが意識されているのではないかと考えた。それに対して熟練教師の学習者への働きかけにはどんな目標が意識されているのかを明らかにできれば、目標の多層性の実態が明らかになるのではないかと考えた。

2つ目は、熟練教師の目標の多層性がどのように形成されたのか、ライフヒストリーインタビューにより明らかにするという課題である。多層性が生まれるには、十分な経験と「観」の変容が必要である。そのきっかけとなった「出来事」としてどのようなものがあるのか、をインタビューによりライフヒストリーとして明らかにしようと考えた。

3. 研究方法

2020年以降コロナ禍の中で教育実践現場への参入がしにくい状況ではあったが、ビデオ撮影やオンラインでのインタビューも使用し、さまざまな現場（小学校、日本及び海外の大学、日本語学校）において熟練教師の授業参観、インタビューを行い、目標構造の多層化（授業目標⇒教科目標⇒人間目標）がライフヒストリーの中で生起していることを明らかにしてきた。その成果を二点にわたって説明する。

一点目は、初任期教師の授業分析である。この成果は「初任期教師の授業実践指導力の課題と課題克服のための支援ツール（ループリック）の開発」『三重大学教育学部紀要 第69巻』2018、pp. 531-539 にまとめた。

論文では、4人の初任期教師の抱える「困難さ」を次のように整理した。1つは、授業の構想、展開力不足である。何を一番、この授業で考えさせ、できる、わかるようにさせなければならないのか、それを核に授業が組まれているか、である。断片的な活動はそれぞれにあるのだが、それが一つの筋（ストーリー）をなしていない。2つ目には、授業が想定している「わかること」「できること」の過程から外れてしまった子どもへの対応力である。想定外のことが起こった時、その場面を「学びの場」に変えることができずにスルーしたり、わからない、できない子どもを置き去りにしてしまうことになる。3つ目に、授業の形式や活動の形態を整えることにエネルギーが注がれ、内容や実質がおざなりにされがちなことである。めあて・ふりかえり（ふりかえりはその位置づけさえ難しいのだが）や対話的な学習としてのペアやグループでの活動は形態が先行し、その実質が伴っていない。例えばペア学習をしても、話ができるような下地がないので、まったく空白の時間になってしまうのである。

上記の3つの課題からは、教えることに汲汲とし、学習者の動きや状況に柔軟に対処しきれない初任期教師の状況が見て取れる。初任期教師の授業の課題は、経験不足からくる指導力不足もとらえられるが、目標構造の単層性からも説明可能である。一時間の授業目標の達成をどのように実現できるか、という観点からの授業構想や運営が行われ、授業の本来の目標である「個々の子どもの能力の育成」という観点からのアプローチができていない状況とも解釈できる。目標構造が単層構造になっており、個々の子どもへの働きかけが可能となる目標層が形成されてい

ないため、子どもの状況を理解できなかつたり、それを重要視できない、ということになってしまうのである。

二点目の研究成果は、熟練教師の目標構造の多層化を明らかにしたことである。

事例研究においては、二人の全く属性の異なる教師（小学校教師と大学教師）を取り上げ、熟練性（共通点）を明らかにした。前年度、取り上げた初任期教師との違いは、これまでの先行研究が明らかにしてきた思考様式の違い、①即興的思考、②状況的思考、③多元的思考、④文脈的思考（佐藤学 他 1991）とは違うアスペクト、目標構造の多層性の違いという観点からも説明できる。すなわち、初任期教師においては、目標構造が単層的であるのに対し、熟練教師の場合目標構造が多層的であり、（授業の目標、教科の目標、人間教育としての目標の少なくとも3層構造）、授業をする際もその目標構造が有効に機能していることが明らかになった。この研究の経緯については、2018年度中部教育学会において報告し、次の論文にまとめることができた。康鳳麗、森脇健夫他5名「熟練教師の目標概念の多層化—二つの事例研究をとおして—」（鈴鹿医療科学大学紀要 No. 25, 2018。二つ目の研究仮説は次のとおりである（図1 研究仮説図）。

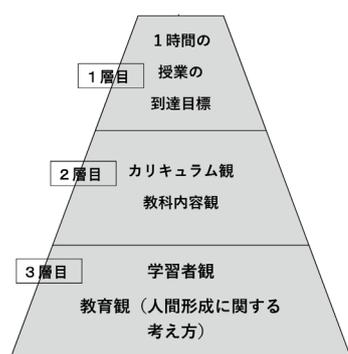


図1 研究仮説図

初任期教師の場合、目標構造は1層目に限定されがちである。初任期教師が感じている課題として「教材研究の時間不足」が挙げられる（筆者が行ってきた新任教師研修におけるアンケート調査でも例年、悩みのトップに挙げられている）が、一層目をまず確実に自分のものにする、というところから新任教師の歩みが始まることが推測できる。経験を積むにつれて、第一層目は二層目、三層目へと多層化していく。三層目への広がり、ただ単に経験を積むだけではなく、ある種「出来事」との出会いが必須である。それが「観」

の転換をもたらしたときに三層目へ発展していく。

ここで留意しておかなければならないのは、三層目に進んだからと言って、一二層目が消えるわけではないことである。むしろ一層目の目標も二層目、三層目と多層化することで、より充実した形で目標が実現されるのである。

4. 研究成果

熟練教師への発達は、「観」の形成と授業スタイルの確立と私は考えてきたが、その「観」の形成は、具体的には目標概念の多層化として描くことができる。そのことを、初任期教師と熟練教師の比較対照研究、及び熟練教師の授業における学習者に対する行動（働きかけ）や支援とそのライフヒストリ的理解によって明らかにすることができた。

いずれも事例研究として行ってきたが、事例数が限られているとはいえ、対話的モデルの作成と事例研究の往復によって、モデルの適用可能性を高めることができた。さらに先行実践研究やこれまで私が行ってきた事例研究とも照合することができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

| | |
|--|-----------------------------|
| 1. 著者名 森脇 健夫・康鳳 麗・坂本 勝信・小西知代・胡 君平 | 4. 巻 第73巻 |
| 2. 論文標題 ストップモーション&ライフストーリーインタビューによる授業研究 - 中国人日本語教師の授業形成史研究 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 537 - 551 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 角谷 道生・森脇 健夫 | 4. 巻 第73巻 |
| 2. 論文標題 対話的事例シナリオ実践（高校教科福祉）における生徒の内面的変容過程の検証 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 (553 - 559) |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 坂倉 伊織・森脇 健夫 | 4. 巻 第73巻 |
| 2. 論文標題 sense of agency を育てる振り返り実践の研究 - 子どもたちとの「振り返りの手引き」作成を通して | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 (561 - 573) |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 鈴木 秀・森脇 健夫 | 4. 巻 第73巻 |
| 2. 論文標題 高等学校におけるピア・レスポンスを活用した自由英作文指導の研究 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 (575 - 590) |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 森脇 健夫 | 4. 巻 第72巻 |
| 2. 論文標題 授業におけるふりかえりの実践的研究 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 383 -397 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 康 鳳麗, 森脇 健夫, 坂本 勝信, 小西 知代, 田 泉 | 4. 巻 27号 |
| 2. 論文標題 初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成 - 2名の中国人日本語教師の14年間の足跡を追って | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 鈴鹿医療科学大学 | 6. 最初と最後の頁 23-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 森脇 健夫 | 4. 巻 495号 |
| 2. 論文標題 「新しい日常生活」で育つ非認知能力 (“grit” 「やり抜く力」) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 学習研究 | 6. 最初と最後の頁 16-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 森脇 健夫 | 4. 巻 第3号 |
| 2. 論文標題 地域の教育課題解決演習の4年間 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 三重大学紀要職大学院論集 | 6. 最初と最後の頁 93-104 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 森脇健夫 | 4. 巻 71巻 |
| 2. 論文標題 教員養成型PBL教育のカリキュラム開発研究 リフレクションツールとしてのコンセプトマップを用いてー | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 339-346 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 角谷道生・森脇健夫 | 4. 巻 71巻 |
| 2. 論文標題 高校教科福祉におけるピア・レビューを用いた動画を含む「授業」づくりの効果と検証 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 523-531 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 森脇健夫 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 めあて・ふりかえりの質の向上から主体的・対話的で深い学びへ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 伊勢市教育委員会、令和元年度 事業報告書 | 6. 最初と最後の頁 42-43 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 康鳳麗、森脇健夫、他5名 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 熟練教師の目標概念の多層化ー二つの事例研究をとおしてー | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 鈴鹿医療科学大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 83-96 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 森脇健夫 他8名 | 4. 巻 70 |
| 2. 論文標題 教師の「観」の発達と教育実践の変容 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 431-438 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 森脇健夫 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 平成29年度「学力向上推進事業」の五十鈴中学校研究活動に関わって | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 平成29年度 事業報告書 学力向上推進事業 (伊勢市教育委員会) | 6. 最初と最後の頁 116,117 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 森脇健夫 | 4. 巻 69 |
| 2. 論文標題 初任期教師の授業実践指導力の課題と課題解決のための支援ツール (ルーブリック) の開発 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教育学部紀要 | 6. 最初と最後の頁 531 ~ 539 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 森脇 健夫 |
| 2. 発表標題 対話的事例シナリオを核としたカリキュラム評価のツールとしてのコンセプトマップの可能性と課題 |
| 3. 学会等名 第27回 大学教育研究フォーラム |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 康 鳳麗 森脇健夫 坂本勝信 |
| 2. 発表標題 日本語教師の初任期から熟練期への「二重の応答性」の発達 |
| 3. 学会等名 中部教育学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 1.山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・中西康雅・赤木和重・大日方真史・守山紗弥加・前原裕樹・大西宏明 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 三恵社 | 5. 総ページ数 206 |
| 3. 書名 PBL事例シナリオ教育で教師を育てる 教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法 | |

| | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 グループ・ディダクティカ | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 勁草書房 | 5. 総ページ数 271 |
| 3. 書名 深い学びを紡ぎだす | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|